



小さな島の小さな印刷所の挑戦

故郷・小値賀島と活版印刷を後世に残していきたい

OJIKAPPAN 横山 桃子

はじめに 故郷・小値賀島について

こんにちは。横山桃子と申します。

私の住む小値賀町は、長崎県五島列島の北部に位置する人口2,000人ほどの小さな島です。平成大合併の際に他の市町と合併しない道を選んだことにより、長崎県で一番小さな自治体となりました。島全体が西海国立公園に指定され、2018年には世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」に登録された野崎島も有しています。遣唐使船が寄港する場所でもありました。太古の昔からあらゆる土地の人々との交流があり、その文化を受け入れてきました。そのため島という閉ざされた地でありながら、おもてなしの心が根付いた島民性は、今でも観光客や移住者を温かく迎え入れています。

海に行けば魚に出会い、山に行けば鳥のさえずりが聞こえる。畑を耕して野菜を育てるもよし、居酒屋に

繰り出し、地元の仲間たちと交流するもよし。はたまた、休日にはただ海をながめてぼーっとする。都会とは違った暮らし方がそこにはあります。幼い頃から父親とドライブに行けば、「こげんよか島はどこにもなかとぞー」と聞かされて育ちました。そのような環境もあり、気づけばこのふるさとが何よりも大好きになりました。

家業・活版印刷の良さに気付く

父と母は、島で100年続く活版印刷業「晋弘舎」を営んでいます。現在ではとても珍しい存在となった活版印刷は、約5世紀前にドイツのグーテンベルクによって発明されました。ルネサンス期の三大発明の一つとも言われており、活版印刷が発明されたことで書物が爆発的に普及し、宗教革命の一端を担うことになったと言われています。

もともと総合商社だった晋弘舎



晋弘舎印刷



Profile

オヂカッパン OJIKAPPAN 横山 桃子

1988年、長崎県小値賀町生まれ。岡山県立大学デザイン学部卒業。東京の編集プロダクションに勤めた後、23歳で小値賀島へUターン。100年続く家業の「晋弘舎」で4代目として活版印刷に携わる。2018年、自身の工房「OJIKAPPAN」を起業。小値賀島と活版印刷を後世に残し伝えていくための活動に邁進している。



は、二代目の祖父の、「活版印刷は文化事業だ」との思いから印刷業だけを手元に残し、他はのれんわけしと聞きました。二代目の思いが強く残る活版所は、家の土間を挟んですぐ隣にあり、私は生まれた時から印刷機のカシャンカシャンという音、そしてインキの匂いと共に育ちました。

高校までを島で過ごし、大学は中学生の時からずっと興味を持って

たグラフィックデザインを学びたく、岡山県のデザイン学部がある大学へと進学しました。

家業である活版印刷の良さに気づいたのは、大学進学のために島を離れてしばらく経ってからのことです。長期の休みに帰省し、はじめて活版印刷を体験しました。数万字という膨大な活字の中から一字ずつ活字を拾い、細かいパーツを組み合わせて版をつくり、印刷機にセット

して凸面にインキを乗せ印刷する。その工程一つひとつがとても繊細で、とても時間がかかります。しかし、カシャンと大きな音をたててできあがる印刷物を手に取った時に、思わず声をあげるくらい感動したことを今でも覚えています。

大学でデジタルの印刷に慣れていた私は、「印刷に表情がある」ことに、このときはじめて気づきました。凸面を印刷するため、印刷された部分にわずかな凹みがあること、そしてインキの乗り具合、活字のつづれ具合によって文字にブレが生じる。その微妙なブレが、デジタルにはない心地よさを出してくれていると感じました。

この日から、活版印刷も小値賀島と同様、私にとってなくてはならない存在になりました。

「魅力溢れる活版印刷技術と大好きな故郷・小値賀島を後世に残していきたい！」

気づけばこの想いが強くなり、そのための活動をしていくことが私

の生きる源となりました。

Uターンするまでの道のり

しかし、すぐには「島に帰って家業の活版印刷を仕事にしよう」と言う考えには至りませんでした。そこには小さな島ならではの大きな課題があります。過疎化著しい離島では、





「島でも働ける」と言う選択肢がな
いままに皆、高校を卒業とともに島
を離れ、離れた先で就職することが
当たり前でした。私も例に漏れず、
どんなに地元が好きでもどんなに活
版印刷がやりたくても、「小値賀に

帰る」ことが将来の選択肢の一つに
あることさえ気づかないまま就職活
動をしていました。そんなある時大
学のゼミの先生が問いかけてくれま
した。「そんなに小値賀が大好きで、
活版印刷もやりたいんだったら、島
に帰って働いてもいいんじゃないの
か？インターネットも発達している
今の時代、どこでも働けるんじゃない
のか？都会が必ずしもいいという
ことではないと思うよ。やり方次第
で可能性はいくらでもある」と。

どれほど自分が固定概念に縛ら
れて生きていたのかに気づかされる
とともに、初めて「島に帰って働ける
んだ！」という選択肢と希望が私の
中に生まれた瞬間でした。そこから
卒業までは、如何に両親を説得する
かということに時間を割きました。

自分の代で活版印刷業を終わらせ
ようと考えていた両親にとっては、
私が島に帰り活版印刷を仕事にす
るなんてことは微塵も考えていな
かったのです。

ゼミの先生にたくさんアドバイ
スをいただきながら島に帰ってどう
生計を立てていくのかをまとめた企
画書を作成し、両親にプレゼンした
こともありました。しかし社会経験
がないままに島へ帰ってくることはど
うしても許すことができないという
両親の想いも見逃すことができな
かったため、大学卒業と同時に東
京へ行き、小さな編集プロダクショ
ンに勤めました。島での暮らしとは
180度異なる東京での生活は驚
きの連続でした。当時は、すぐにでも
島に帰りたいと毎日のように思って
いましたが、島に住む今では東京で
の暮らしを経験できてよかったと心
から思えます。

月日が流れようやくUターンで
きたのは、2011年の6月です。
東日本大震災の影響を心配した両

親が小さな声で帰ってきてもいいと
言った言葉を聞き逃さず、帰るなら
今だ、と荷物をまとめたことを鮮明
に思い出すことができます。

大好きな故郷で 活版印刷ができる喜び

跡を継ぐ際に親から出された条
件は、「自分の食い扶持は自分で稼
げ」というものでした。活版印刷の技
術については必要最低限のものを教
えてもらい、あとは実践しながら紙
の仕入先や価格の設定等を学んで
いきました。おかげさまで活版印刷
を始めてすぐから、名刺印刷を中心
に全国各地から注文をいただける
機会に恵まれなんとかやっていくこ
とができました。パソコンを扱うこと
ができない父親は今まで通り島内の
注文を受け、私が島外のお客様の注
文を受けるといいうように自然と役
割分担されて行きました。

私がUターンした2011年頃
は、ちょうど古き良きものが見直さ

れ始めた時でもあります。経済成長
とデジタル化の波で安くて早く印刷
されるオフセット印刷が主流となっ
ていた中で、手間暇をかけて出来上
がる活版印刷は、東京で活版印刷を
テーマとしたイベントが開催される
など、若い人たちを中心に注目を浴
びるようになっていました。そういつ
たタイミングも重なり、島で100
年続く活版印刷屋はメディアにも取
り上げていただく機会も多々あり、
今まで仕事には困ることなく続ける
ことができました。

大好きな島で、活版印刷に携わる
中で一番喜びを感じるときは、私が
はじめて活版印刷に感動したあのと
きと同じように、お客様が活字や印
刷されたものに触れ、感動に溢れた
笑顔を見せてくれるときです。遠方
からのお客様が多いため、直接でき
あがったものをお渡しできないこと
がほとんどなのですが、印刷物を発
送する際には、活字で組んだ版の写
真を同封するなどの工夫もしてい
ます。



その一工夫をするだけで、お客様は印刷物ができあがるまでの物語を想像することができ、簡単にできてしまうデジタルの印刷物とは異なり、印刷されたものに愛着をもてるようになります。そういった温かみを提供できることも活版印刷の魅力だと感じています。さらには、活版印刷でのつながりをきっかけに小値賀島に遊びにきてくださるお客様もいて、そういった出会いに触れるたびに、島に帰ってきて活版印刷を父の代で終わらせるようなことにならなくてよかったな、と強く思います。

OJIKAPPANの立ち上げ

しかし、活版印刷に携わり5年ほどが経った頃、このペースで活版印刷や小値賀島の活動をしていくことが私の目指している未来につながるかなのかと疑問を持つようになりました。名刺印刷を中心に活版印刷をし、合間にデザイン業と地域活動に積極的に参加してきましたが、気づけば、それらの活動がルーティンワークとなり、閃いた新しい活動や挑戦してみたい活版印刷の仕事

事などに手を出せない、ルーティンから抜け出すことができなくなっていました。いつかこのルーティンから抜け出さなければいけない。8年ほど前からそのような思いが沸々と湧いてきました。

もっと責任感をもち、新しい活動を表現していく場を作りたいと思い、2018年春に「OJIKAPPAN（オヂカッパン）」を開業しました。小値賀島と活版印刷への思いをそのまま屋号にしています。

まだまだ未熟者ですが、目先の利益を生むだけではなく、同時にその町の未来を見据えながら活動していきたいと思っています。いままでやってきた、活版印刷の受注生産やデザイン業を行うことはもちろんのこと、お客様のニーズに合わせた活版印刷体験の提供、デザインと地域の魅力を掛け合わせたオリジナル活版印刷商品の開発・販売、他地域や他業種とのコラボレーション、などなど、小値賀島の「温度」が伝わるような商品をお客様に届けたい。お客様

が喜んでくれたら町の魅力が一つ上がる。町の魅力が一つ上がれば、さらに良い商品がお客様に届く。そんなことを繰り返しながら、小値賀島と活版印刷を後世につないでいきたいのです。

開業して6年が経ちますが、実際にあらゆる方面とのコラボレーションが始まっています。その中でも大きいのが、長崎県で小値賀の次に小さな自治体である東彼杵町との交流です。あるイベントで一緒に出店させていただいたことをきっかけに繋がり、東彼杵町にも九州荷札印刷という大きな活版印刷会社があったことを知りました。活版印刷の日本における普及は明治期に長崎から全国へ広まったという歴史もあり、この長崎に活版の文化を守り伝えていくことの重要性も強く感じていたこと、東彼杵でも再び活版の文化を、との思いが重なったことで、東彼杵町でも活版印刷の体験ができる場が誕生しました。そして、その環境整備にも関わらせていただきました。



体験の様子



体験(組版)の様子



最後に

活版印刷の仕事においては、ずっと1人で向き合ってきました。もちろん両親へ相談することもありますが、基本は1人です。直近の目標は、新しいスタッフを迎え入れることです。持続可能性を考えたときに、

1人でやるには限界があるとずっと思っていました。この小値賀島で活版印刷業がまた100年続いているためには、ある程度安定した経営体制も築いていかなければなりません。新しいスタッフを迎え入れた時にか、今はそのことを楽しみに励んでい

ます。

小値賀町においては人口減少の一途を辿っており、その数字と向き合うと悔しい感情もこみ上げてきます。しかし、人口の数だけが地域の魅力を語るわけではもちろんありません。小値賀町の魅力に惚れ込んだ移住者やUターン者は、毎年一定数いて、さらに近年は農水産物のお土産物の商品開発や、いままで島になかったパン屋さんやカフェがオープンするなど、賑わいをみせています。

私は小値賀のおおらかで外から来た人たちを受け入れる温かな心をもった島民性が大好きです。太古の昔からそうであったように、これからもあらゆる背景を持った人や文化を受け入れ、より魅力的な町にしていく、その一助を担っていきます。

小値賀島と活版印刷が、今後どういった姿に変わっていくのか、この日本の小さな島の小さな工房から、小さくてもこんなに輝く未来があるんだ、ということ発信していきたいと思っています。



東彼杵郡のみなさんと



〈 OJIKAPPAN お問い合わせ先 〉

住所：〒857-4701
長崎県北松浦郡小値賀町笛吹郷1738

Mail: info@ojikappan.com

H P: https://ojikappan.com

